様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００９９３

研究課題名（和文）アセスメント「学びの物語」における個と共同体の試行錯誤過程と研修プログラム開発

研究課題名（英文）Adaptation Processes of "Learning Stories" by Individuals and Communities, and the teacher training program

研究代表者
川端　美穂（KAWABATA, MIHO）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：００３９９２２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,040,000円

研究成果の概要（和文）：政策主導でLSの導入・推進が図られたドイツとは異なり、日本のLS実践は、子どもを肯定的に捉え、より良い保育を希求する園や保育者の存在が導入の契機になっていたこと、ドイツの実践者に課せられている「子どもの探究心を広げ、援助し、誘発すること、学び方の学習を促進すること」はあまり意識されておらず、子どもの「育ち」を家庭に伝え保護者との関係をつくるという側面がクローズアップされることが明らかになった。一方、NZのLS実践は、コミュニティ及び個人の試行錯誤や専門性開発プログラムによって編み上げられてきており、現在もLSの活用方法や書式の工夫等について検討が重ねられ、変化の途上にあることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
NZの乳幼児教育施設は学習の場であり、LSは有能で可能性のある学び手としてのアイデンティティ形成のために、顕在的・潜在的なスキルや知識と「学びの構え（disposiions）」を価値づけるツールである。翻って、日本の保育における「遊びを通した学び」の援助に求められるのは、「知識やスキル（できる・できない）」にとらわれない子どもの気持ちの理解に焦点づけられる。日本のローカルな保育の文脈で、LSが学び手としての有能さや可能性に気づき、分析し、応答する場としても定位していくには、大人の側の「学びの構え」の捉え方やその描出方法に関する試行錯誤過程が今後の展開の有効な手がかりとなる。

研究成果の概要（英文）：Unlike Germany, where the introduction and promotion of Learning Stories (LS) have been pursued at a policy level, LS practices in Japan have been introduced as voluntary initiatives by kindergartens and practitioners who seek to affirm children and prioritize child-centered care. It became evident that the focus in Japan is more on conveying children's " development" to families and building relationships with parents, rather than emphasizing the role of practitioners in expanding, supporting, and eliciting children's inquisitiveness and promoting learning-to-learn, as is expected of practitioners in Germany. On the other hand, in the development and dissemination process of LS in New Zealand, the significance of practitioner-led "research" within the practice, such as exploring perspectives on learning and considering the format, has been recognized. This suggests that such research could also be a key for future development in LS practices within Japan.

研究分野：発達心理学

キーワード：学びの物語　受容過程　学び　子ども理解　保育コミュニティ　試行錯誤　内容分析　現任研修

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

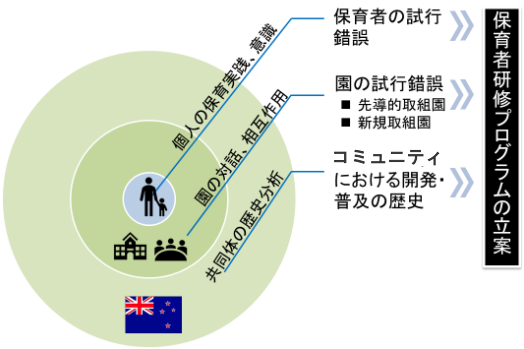
「学びの物語（learning Stories: 以下 LS）」は、乳幼児保育カリキュラム「Te Whàriki テ・ファリキ」を掲げる国ニュージーランド（以下 NZ）で開発された、子どもの学びを理解し促すためのアセスメントである。ナラティブと写真で子どもの学びと育ちを記録する LS は、各国の保育現場に導入されている。LS の革新性は、①学びの成果を、個人内部の知識やスキルで測ろうとする旧来の学習観から、学び手と文化的環境との「中間」に形成される「学びの構え（dispositions）」や文化的実践への参加のレパートリーの変容にみる学習観へ、②「できないこと」に焦点をあてる欠損モデルから、「できること」を見ようする信頼モデルへ、③大人がチェックリスト等で査定する収束的・総括的アセスメントから、大人と学び手が語り合いながら共同で学びをつくっていく拡散的・形成的アセスメントへ、の転換にある。NZ ではこのようなラディカルな転換を、研究者、実践者、専門性開発ファシリテーターらの協働によって成し遂げてきている[1]。

NZ の LS は日本でも優れた保育実践として紹介され[2, 3]、保育関係者に大きなインパクトを与えてきた。国内の LS は、大宮勇雄らによる福島大学附属幼稚園の実践にその源流があり[4, 5]、気になる子を対象に LS の導入が図られ、子どもを信頼するという特質のもと記録と対話を重ねることで「子どもが肯定的に見えてくる」という保育者のまなざしの変化が強調された。これまでに、LS を綴ることで「子どもの世界がリアルに見えてきた」[6]、「対等で、応答的なかかわりが引き出された」[7]、「従来の子どもの未熟さや問題点を指導によって改善することを目指す保育から、保育環境の調整によって遊びや仲間関係の充実を目指す保育へと展開した」[8]等の報告がある。

しかしながら他方で、学びや育ちの捉え方が書き手によってバラバラ、親受けを意識したアルバムになっている、LS に切り取られたポジティブな姿と生活場面で苦悩する姿が乖離している、といった声も聞かれ、「学びに気づき、分析し、応答する」場として定位しているとはいえない現実もある。NZ では、LS 実践に関する専門性開発プログラムの構築が順次行われており[9]、卓越した実践はコミュニティ及び個人の試行錯誤によって支えられていると考えられるが、それらの過程についてこれまで十分に検討されてきていない。

〈研究の概念図〉

「学びの物語」はどこから来たのか、どこへ行くのか
－個と共同体の試行錯誤過程と研修プログラム開発－



2. 研究の目的

本研究は「学びの物語」実践における個人と園と保育コミュニティ（共同体）の試行錯誤の協働プロセスを描出することで、「学びの物語」実践の有効性と課題を解明し、その成果を保育者研修プログラムで検証することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、比較教育学の手法を用いた資料分析により、NZ、日本、ドイツにおける LS の導入の背景や現在の定位の状況を明らかにしながら、NZ 及び国内の LS 実践園で観察調査と関係者へのインタビューを実施した。入手した文献、保育実践の記録、観察者のフィールドノーツ、研究協力園で作成された LS、関係者へのインタビューやカンファレンス等の記録をもとに、（1）日本とドイツの保育コミュニティにおける LS の受容過程、（2）園及び個人レベルでの試行錯誤過程、（3）LS でアセスメントされる「学び」もしくは「育ち」の成果と保育の特質との関わりを明らかにし、得られた知見をもとに LS の研修プログラ

ムにまとめ、その効果を検証した。

4. 研究成果

（1）NZ、ドイツ及び日本における「学びの物語」の導入・受容過程

NZ では旧来の「学び」のアセスメントにおける、個人の文脈から切り離された画一的な「頭の中の」スキルや知識の偏重への反省から、状況に埋め込まれた意図的な方略やモチベーションなどが重要な役割を果たす「学びの構え（dispositions）」に焦点をあてて教育的介入を行うために LS が開発された。1995 年に Margaret Carr らによるアセスメント開発の研究プロジェクトが始まった当時、現場では具体的な子どもとのやりとりを記録しながら、同時に学びの構えの「決定的な」瞬間を捉えることの難しさに、戸惑いや疑問が強く、次いで普及のためのプロジェクトが開始された[10]。この草創期にはカリキュラムの目標に合った効果的なアセスメントの工夫が求められ、それが NZ 教育省のウェブサイトに公開されている『学びのためのアセスメント：保育実践事例集』全 20 巻の刊行と専門性開発プログラムの構築につながった。注目すべきは、この試行錯誤過程において、実践者たちが一般的なアクションリサーチにおける「研究される」側の協力者以上の役割を果たしてきたことである。実践者は、当事者だからこそ知り得た情報や日常の実践知を用いて、研究者が現場に持ち込んだ理論や最新の教育法の実践的意味を検証する一方、自分たちの実践に有益な情報を模索する中で、それまで抱いていた教育観や実践観に変化をもたらすようなアイデアを共同で構成してきたとされる[11]。そのプロセスは現在も継続されており、2017 年に NZ 教育評議会（Education Council）が出版した『Our Code, Our Standards』[12]においても、実践の展開に向けて現場で調査／研究を実施する必要性と、協働による問題解決の重要性が明記されている（pp.18-21）。2023 年 2 月に実施した NZ の保育実践者への聞き取りでも、NZ 教育評価局（The Education Review Office：以下 ERO）の要請に応えて、各現場の問題意識にもとづいて調査研究が実施されており、その成果は ERO への報告書に記載するようになっていることがわかった（例えば、オークランドのある園では、家庭からの LS へのフィードバックに差が見られたことから、各家庭で LS がどのように読まれているのかについて、保護者へのアンケート調査が実施されていた）。つまり、NZ の LS 実践は、現在も変化の途上にあり、各園で書式の工夫や LS の活用方法等について検討が重ねられ、探索的な試みも行われている。

LS は、世界各国の保育現場で関心を集めており、本研究ではドイツにおける導入・受容過程と日本のそれとを比較しながら、それぞれの特質を検討した。まず、連邦制をとるドイツでは、保育制度やカリキュラムは州ごとに異なるものの、総じて保育施設は子どもの保護を中心とする福祉的な性格の強いものであった。それが、2001 年のいわゆる「PISA ショック」以降、乳幼児期の「教育」や「学び」が全国的に重視されるようになり、「一人ひとりの能力や学びに向かう力を幼児期から強化し、子どもの探究心を広げ、援助し、誘発すること、価値の教育、学び方の学習を促進すること、社会的な文脈における世界習得」などを実現することが保育施設の使命とされた[13]。LS の広がりの契機となったのは、2004 年から 2007 年にかけて行われた研究プロジェクト「Bildung（ビルドゥング）と学びの物語（Bildungs-und Lerngeschichten：以下、ドイツ版 LS）」であり、ドイツ版 LS プロジェクトとドイツで実際に作成された LS に関する文献検討の結果、ドイツにおける LS 受容の特質として、①政策主導で LS の導入が図られたこと、②LS 導入の強調点が「学び」あるいは「学びの体系的な観察・記録」にあること、③保育現場では導入の意図が部分的に達成されているものの、園や保育者の保育観・教育観を反映しながら多様な形で LS が実践されていることが明らかとなった。

他方、日本における LS の導入経緯について、各実践園の報告書等を踏まえて、関係者へのインタビューを実施し検討した。具体的には、大宮勇雄、松井剛太による働きかけを機に LS を導入した先行園、新規に 2019 年度より LS 実践を開始した A 園の事例を分析した結果、福島大学附属幼稚園や丸亀ひまわり保育園など比較的初期の導入園では、研修や研究の機会を提供した研究者が導入に大きな役割を果たしており、実践の継続や発展にもその影響が見られた。なお、一部に研究者に依らず実践者が LS と出会い手探りで導入した B 園のような事例もあったが、いずれも日本国内の LS 実践は自治体の政策主導で導入が図られたドイツとは異なり、子どもを肯定的に捉え、より良い保育を希求する保育者たちの存在が導入のキーになっていた。

（2） 国内 LS 実践における試行錯誤の実際

2019 年度より新規に LS 実践に取組んでいる A 園と、10 年にわたる実践の蓄積がある B 園の事例から、LS 導入時の保護者への説明、実際の書かれ方、家庭との共有のあり方、書き手の意識や葛藤等、園及び個人の試行錯誤過程を検討した。そこから見えるのは、1) 保育者の意識は子どもの「頑張る」姿を家庭と情緒的に共有することに向けられ、「学び」の形成的アセスメントとしての側面よりも、保護者との関係をつくるツールとしての側面がクローズアップされること、2) 同僚とのフォト・カンファレンスは子ども理解を広げる機会になるが、「学び」の意味を共同で生成する場にはなりにくいこと、3) 「学びの成果（learning outcomes）」は、学びの進歩（progression）よりも「育ち（development, growth）」に焦点があてられ、NZ でコード化されている「学び」の原則や要素よりも園と書き手の保育観及び発達観に委ねられること、等である。

（3）LS でアセスメントされる「学び」もしくは「育ち」

NZ では、教育とは「生きる様式に関わる」レパートリーを増やすこと、「人生が進んでいくであろう新しい方向を示すこと」であると強調される[14]。NZ の研究協力園の LS の内容分析と保育者・保護者へのインタビューにより確認できたのは、「有能感」や「自信」につながる LS 実践が推奨され、その中で子どもに起こっている学び、テ・ファリキとのリンクや保護者との対話、次なるサポートの記載が理想的なアセスメントとされていることである。NZ の幼児教育施設 2 園と国内 A 園で作成された LS の内容分析を行ったところ、NZ では「観察」「分析」「応答」から構成される書式で、文字や数の知識、筆記具やハサミ等の道具を扱うモータースキルなど、個人の知識やスキルが価値ある学びの成果として、そして更なる学びの資源になるものとして記録され、学びを促すための提案（保育計画）の記載が必須となっていた。

翻って、国内の調査協力園の書式は自由記述で、学びを読み取ることは必ずしも強く意識されておらず、何が切り取られるかは保育者の「学びの構え」に依っていた。A 園の LS の特徴をテキストマイニングにより分析したところ、LS に頻繁に登場するのは、子どもが何かに心を動かされている様子や難しい状況に遭遇したときに他者と協同で臨機応変に創出される行為であり、日本の保育実践における「肯定的な子ども理解」は個人の知識やスキルなどの要素とは異なる方向にあることが伺えた。日本の保育の文脈には、「遊びを通しての学び」という概念があるが、「学び（learning）」をどのように捉えるか、どのような子どもの姿を「良い」ものとして選択的に促すのかは、いまだに価値的な議論が求められる状況にある。なお、保育の「良さ」を追究する方途の一つとして LS 実践に取り組む B 園では、「学び」の価値をどこに置くのか、どのように記述していくのかについて、保護者を含め多様な声を集めながら議論の過程を開き、実践を多角的に検討していこうという動きも見られる。今後、子どもの学びもしくは育ちを捉える視点や LS の書式及び活用方法がどのように変容するのかについて注視していきたい。

（4）乳幼児期の「学び」を「学び合う」研修

上述の研究経過から、LS 実践の目的は一様でなく、「保育者のまなざしの変化」「保護者との子どもの育ちの共有」「遊びの広がり」等、強調点や語られ方に各園の特徴が見られ、保育のエピソードを記述することと保育活動とのつながりについては複数の経路の存在が明らかになった。他方で、園内のカンファレンスや研修場面で個々の保育者の子ども観や保育観が可視化されていくプロセスが、「学びの物語」の足場づくりになっていることも示唆された。そこで、2 つの研究フィールドで、それぞれ園内研修を実践者らと企画し、実施した。A 園では他の LS 実践園の実践者と共同で LS に切り取られた写真と文章を再検討する研修、B 園ではエピソード記述[15]を読み合い、学びと育ちについて語り合う研修であり、いずれも事後の聞き取りから実践者らのニーズに応える内容であったことが確認できた。そのニーズとは、教育と養護（ケア）の相互循環・絡み合いのなかで、学びの成果として「何を」「どのように」捉えれば、子どもの学びと育ちを価値ある形で示すことができるのか、ローカルな文脈で言語化していくための手がかりである。

---

[1] Carr, M. & Lee, W. (2012). *Learning Stories: Constructing Learner Identities in Early Education.* SAGE Publications.

[2] 大宮勇雄 (2006).『保育の質を高める』ひとなる書房.

[3] 鈴木佐喜子 (2009).「子どもの育ちを大切にする保育『評価』をもとめて--保育所保育指針とニュージーランドのアセスメント『学びの物語』」『季刊保育問題研究』238, 28-40.

[4] 大宮勇雄・平林秀美・白石昌子(1997).「保育指導の『計画性』と保育形態の選択 福島県の幼稚園のカリキュラム調査報告（1)」『福島大学教育実践研究紀要』33, 89-96.

[5] 大学附属幼稚園・大宮勇雄・白石昌子・原野明子 (2011).『子どもの心が見えてきた―学びの物語で保育は変わる』ひとなる書房.

[6] 橋川喜美代 (2012).「テ・ファリキとラーニング・ストーリーから実践記録を読み解く」『鳴門教育大学研究紀要』27, 12-24.

[7] 大宮勇雄 (2010).『学びの物語の保育実践』ひとなる書房.

[8] 吉川和幸・上村毅・川田学 (2017).「『信頼モデル』による記録，評価は障害児保育実践をどう変えるのか」『保育学研究』55(1), 55-67.

[9] 鈴木佐喜子(2013).「ニュージーランドの保育と「学びの物語」実践の現状と課題」, マーガレット・カー, 大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする―「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房, pp.306-316.

[10] Carr, M. (2001). *Assessment in Early Childhood Settings: Learning Stories.* SAGE Publications.

[11] マーガレット・カー & ウェンディ・リー、大宮勇雄・塩崎美穂・鈴木佐喜子・松井剛太監訳 (2020). 『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか－保幼小におけるアセスメント実践「学びの物語」』ひとなる書房.

[12] Education Council (2017). *Our Code, Our Standards.* The Education Council, New Zealand.

[13] Jugendministerkonferenz/Kultusministerkon- ferenz (JMK/KMK) (2004). Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen. (http://www.kmk.org/fileadmin/veroeffentlichungen_beschluesse/2004/2004_06_03-Fruehe-Bildung-Kindertageseinrichtungen.pdf, 2021 年 10 月 20 日閲覧)

[14] Carr, M. (2001). *Assessment in Early Childhood Settings: Learning Stories.* SAGE Publications, p.15.

[15] 鯨岡峻 (2015).『保育の場で子どもの心をどのように育むのか―「接面」での心の動きをエピソードに綴る』ミネルヴァ書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　17件）

１．著者名 玉瀬友美・中山美香・岡谷里香・川端美穂	４．巻 第83号
２．論文標題 保育ドキュメンテーションに見られる子どもの姿	５．発行年 2023年
３．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	６．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 玉瀬友美・池本浩子・中山美香・廣瀬愛・植田優・都築郁子・大西美玲・岡林律子	４．巻 第83号
２．論文標題 小学校での学びにつながる幼児の姿と生活科の授業の工夫	５．発行年 2023年
３．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 二井仁美	４．巻 19
２．論文標題 少年教護法制下における家庭学校の教育	５．発行年 2023年
３．雑誌名 奈良女子大学文学部研究教育年報	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yumi Tamase and Masayo Yabunaka	４．巻 第82号
２．論文標題 The influence of parents’ replies on children's speech in parent-child interactions while reading picture books: Focusing on the sentence-ending particle “Ne”	５．発行年 2022年
３．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	６．最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 玉瀬友美、中山美香、鎌倉正子、岡谷里香、矢田崇洋、青木佐樹、藤戸綾香	4．巻 第81号
2．論文標題 幼稚園における教育課程の再編成―高知大学教育学部附属幼稚園での取り組み―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中西さやか・二井 仁美・川端 美穂・玉瀬 友美・木村 彰子	4．巻 第18号
2．論文標題 ドイツにおける『学びの物語（Learning Stories）』の受容に関する検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社会福祉学部論集	6．最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Fuminori Nakatsubo, Harutomo Ueda, Takako Yoshida, Mariko Inoue, Sayaka Nakanishi, Aiichiro Sakai, Lok-Wah Li	4．巻 23(4)
2．論文標題 The Educational Intention behind Non-Intervention: A Case on the Japanese Mimamoru Approach as Early Childhood Teachers’ Professionalism	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Croatian Journal of Education	6．最初と最後の頁 1115-1138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15516/cje.v23i4.3980	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 二井仁美・川端美穂	4．巻 －
2．論文標題 保護者調査にみる卒園児の「学びに向かう力」に関する成長実感―園生活で培われる「相互性」「粘り強さ」「想像力」―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 令和2年度北海道教育大学附属旭川幼稚園紀要	6．最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中西さやか	4．巻 第17号
2．論文標題 『子どもの側』から乳幼児期の学びを読み解く視点とはーBildung（ビルドゥング）概念を手がかりとしてー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会福祉学部論集	6．最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 玉瀬友美・桑田美摘	4．巻 第81号
2．論文標題 幼児の描画活動における想像性に影響を及ぼす保育者の関わり	5．発行年 2021年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 49-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川端美穂・川端康弘・佐々木三公子・高橋文代・笠井有利子	4．巻 44 (4)
2．論文標題 100 hue testの制限時間を短縮した評価法を用いて示された大学生の芸術系サークル経験による色識別力の向上	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本色彩学会誌	6．最初と最後の頁 163-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15048/jcsaj.44.4_163	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 玉瀬友美・石田 翔真	4．巻 第81号
2．論文標題 ストーリーの結末が幼児の想像力に及ぼす影響 ―ハッピーエンド絵本とバッドエンド絵本を用いて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 43-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 玉瀬友美、川端美穂、中西さやか、木村彰子、二井仁美	4．巻 80
2．論文標題 語りから捉えた新任保育者の「保育のわからなさ」観の変化 ―幼小連携の人事交流教員を対象として―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤亜紀、玉瀬友美	4．巻 80
2．論文標題 幼稚園での絵本の読み聞かせに見られる保育者と子どもたちによる相互行為に関する一考察 ―「読み聞かせ」というインタラクティブな場はどのように作られているか ―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村彰子、川端美穂、玉瀬友美、中西さやか、二井仁美	4．巻 第51号
2．論文標題 認定こども園における園内研修の取り組み ―リフレクションを促すビデオカンファレンスの在り方―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 札幌国際大学紀要	6．最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 玉瀬 友美、劉智萍	4．巻 80
2．論文標題 中国天津市における幼稚園の現状視察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 143-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yumi Tamase,Takahiro Doihara,Kouichi Nozumi,Kazuhiro Yoshioka,Yoichiro Nonaka,Rika Okatani,Hanae Morishita,Ikuko Tsuzuki,Nozomi Taniwaki	4．巻 Vol.6, No2
2．論文標題 The influence of paint play activities on knowledge and preference for colors in preschool children in health context	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Acta Salus Vitae	6．最初と最後の頁 4-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 若林紀乃・上田敏丈・越中康治・岡花祈一郎・中西さやか・濱田祥子・廣瀬真喜子・松井剛太・八島美菜子・山崎晃	4．巻 第27号
2．論文標題 就学移行期における障害のある子どもへの配慮の引き継ぎ－なぜ就学前の日常的な配慮が小学校で活用されにくいのか－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 乳幼児教育学研究	6．最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 越中康治・上田 敏丈・若林 紀乃・濱田 祥子・岡花 祈一郎・中西 さやか・廣瀬 真喜子・松井 剛太・八島 美菜子・山崎 晃	4．巻 第40巻
2．論文標題 就学移行期における障害のある子どもに関する記録物の作成と活用に関する実態調査 ： 就学前施設と小学校を対象として	5．発行年 2018年
3．雑誌名 幼年教育研究年報	6．最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川端美穂	4．巻 -
2．論文標題 保育現場において幼児が「遊び込む」状況をどうつくるか－子どもと保育者が共に遊びを構造化するために－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北海道教育大学附属旭川幼稚園研究紀要（平成30年度）	6．最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Miho KAWABATA
2．発表標題 The Development of New Practitioners' Possible Self: A Narrative Analysis of In-house Training at a Japanese Kindergarten
3．学会等名 The Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 23rd Annual Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 木村 彰子・川端 美穂・玉瀬 友美・二井 仁美・中西 さやか
2．発表標題 ニュージーランドの保育アセスメント「学びの物語」は 日本の保育でいかに活用しうるか ― 子ども主体の保育に変えたある園の取り組み
3．学会等名 日本保育学会第76回大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 川端美穂[企画・話題提供]
2．発表標題 ラウンドテーブル：支え合い・学び合いで育つ保育者 ケアの循環が人を育てる」、話題提供「保育の現場で「弱さを肯定し、支える営み」 ―ある園におけるエピソード記述の「読み合い」を通して―」
3．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 川端 美穂・玉瀬 友美・二井 仁美・中西 さやか・木村 彰子
2．発表標題 国内ラーニング・ストーリーの特徴 ： 計量テキスト分析による検討
3．学会等名 日本保育学会第75回大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 木村彰子
２．発表標題 地区の保育研究会が30年近く継続しているわけ ―「我が保育者人生」の語りを中心に探るー
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 二井仁美・中西さやか・川端美穂・玉瀬友美・木村彰子
２．発表標題 ニュージーランドの保育アセスメント「学びの物語」の受容に関する一考察①―日本の保育現場に注目して―
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中西さやか・ 二井仁美・川端美穂・玉瀬友美・木村彰子
２．発表標題 ニュージーランドの保育アセスメント「学びの物語」の受容に関する一考察②―ドイツ版「学びの物語」に着目して―
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中西さやか
２．発表標題 子どもの主体的な学びにおける保育者の役割
３．学会等名 日本教育学会第79回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 棚橋裕子・中西さやか
２．発表標題 保育者の捉える『その子らしさ』とは何か―子ども理解に基づく保育を再考する―
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 川端美穂、中西さやか、玉瀬友美、木村彰子
２．発表標題 保育者が保育のエピソードを綴る過程―TEMによる描出と考察―
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi TAMASE, Miho Kawabata, Sayaka Nakanishi, Akiko Kimura, Hitomi Nii
２．発表標題 Consciousness change among novice teachers in personnel exchanges between kindergarten and elementary schools
３．学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association 20th Annual Conference, 12th －14th July 2019, Taipei, Taiwan （Abstracts, p.359）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 玉瀬友美、伊藤亜紀
２．発表標題 絵本の集団読み聞かせにおける幼児の相互作用の分析
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三ツ石行宏、玉瀬友美
２．発表標題 子育て支援活動による大学の地域連携について－保護者アンケート調査の分析を中心として－
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中西さやか
２．発表標題 幼児の 「主体的な学び」 をとらえる評価視点に関する検討 ―Bildung（ビルドゥング）概念を手がかりとして―
３．学会等名 日本教育学会第78回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木村彰子
２．発表標題 新任保育者の育ちを支えるリーダーの役割
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川端美穂
２．発表標題 （大会企画シンポジウム：幼児期の保育のなかにみられる心の理解－情動共有体験のなかで感じ取る「心」と内省的に気づく「心」
３．学会等名 北海道心理学会第65回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川端美穂・榊原久直[企画]；大倉得史・友田明美[話題提供]；佐伯胖[指定討論]
２．発表標題 国内研究交流委員会企画シンポジウム：間主観的，間身体的かかわり合いの中で発達する「心」
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 木村彰子・川端美穂
２．発表標題 保育現場におけるメンタリングのあり方（3）－メンティとメンターの二者関係を支える「場」の同僚性－
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川端美穂・木村彰子
２．発表標題 保育現場におけるメンタリングのあり方（4）－一人称的・二人称的・三人称的かかわりの違いに注目して－
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中西さやか
２．発表標題 保育・幼児教育における学びの評価論に関する一考察
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡花祈一郎・武内裕明・中西さやか
２．発表標題 幼児おける学びの経験とその評価法に関する研究
３．学会等名 中国四国教育学会第70回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中西さやか［企画者・報告者］
２．発表標題 ラウンドテーブル：幼児期の学びをどのように『評価』するのか
３．学会等名 日本教育学会第77回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yumi TAMASE, Aki ITO, Masayo YABUNAKA
２．発表標題 An analysis of children’s interaction during picture book reading sessions －the change in utterances through multiple readings of the same book－
３．学会等名 The Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA)19th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中西さやか［企画者・報告者］
２．発表標題 自主シンポジウム：社会的に不利な子どもの保育を考える－アクセスの平等性を中心に－
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 藪中征代・玉瀬友美
２．発表標題 幼児期の絵本を介した親子の相互作用から捉える子どもの語りの発達的検討－２歳児を中心として－
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 中西さやか	４．発行年 2023年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 239
３．書名 ドイツの幼児教育におけるビルドゥングー子どもにとっての学びを問い直す	

１．著者名 藪中征代・玉瀬友美（編著）、磯部香・笹川宏樹・森田美佐・渡邊ひとみ（著）	４．発行年 2022年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 192
３．書名 子ども家庭支援の心理学	

１．著者名 藪中征代・玉瀬友美（編著）小原貴恵子・川端美穂・堂本真実子・中山美香（著）	４．発行年 2020年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 222
３．書名 子どもの理解と援助―子どもの育ちと学びの理解と保育実践―	

１．著者名 岡本正子、中山あおい、二井仁美、椎名篤子	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 288
３．書名 イギリスの子ども虐待防止とセーフガーディング 学校と福祉・医療のワーキングトゥギャザー	

１．著者名 山野良一・中西さやか監訳、大野歩・鈴木佐喜子・田中葵・南野奈津子・森恭子訳	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 336
３．書名 ルドヴィクァ・ガンバロ， キティ・スチュワート，ジェーン・ウォルドフォーゲル編（2018）保育政策の国際比較－子どもの貧困・不平等に世界の保育はどう向き合っているのか－	

１．著者名 玉瀬友美・土井原崇浩・谷脇のぞみ・中村るい・野角孝一・野中陽一朗・柴英里・斉藤雅洋・吉岡一洋	４．発行年 2019年
２．出版社 リーブル出版	５．総ページ数 98
３．書名 子どもとアートを地域でつなぐ	

１．著者名 二井仁美・川端美穂	４．発行年 2019年
２．出版社 北海道教育大学附属旭川幼稚園	５．総ページ数 50
３．書名 大学という地域資源を活かした「チーム学校」のあり方－北海道教育大学附属旭川幼稚園における取り組み－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	二井　仁美 (NII Hitomi) (50221974)	奈良女子大学・人文科学系・教授 (14602)	
研究分担者	玉瀬　友美 (TAMASE Yumi) (90353094)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授 (16401)	
研究分担者	中西　さやか (NAKANISHI Sayaka) (40712906)	佛教大学・社会福祉学部・准教授 (34314)	
研究分担者	木村　彰子 (KIMURA Akiko) (70713139)	札幌国際大学・人文学部・教授 (30116)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関